鶏豚ふんを飼料に
養豚家に耳よりな話

排せつ物変じて飼料となる……こう聞いただけでは「そんな馬鹿な…」「感じの悪いこと言うな」と叱られるかもしれない。だが終いまで読んでもらいたい。

家畜飼料については、前号広報でルーサンの栽培についてお知らせしたが、こんどは鶏豚糞を加工して飼料をつくる方法のあることをご紹介しよう。

近ごろ自給飼料製造機とでもいうべき「鶏豚糞醗酵装置」なるものが出廻りはじめたが、当町のある農家が昨年これを導入して、相当の成績をあげている。

一トンの飼料をつくるのに要する材料は、米ぬかとフスマ、落花生のカラを粉末にしたものを、それぞれ等量づつ合せて二〇〇kg、これに問題の豚の生糞三〇〇kgと醗酵剤を加えてかき混ぜ、熱を加えて醗酵させ、さましてから更に配合飼料五〇〇kgを加えてかきまぜればできあがり。

豚は好んで食べてくれるし、その上、厚脂肪も防げ、下痢もしないという利点だらけの飼料だという。

配合飼料のトン当り三万七千円に比べて二万三千円ですむから、差額は実に一万四千円、つまり四〇%のコストダウンが可能となる。通常、豚の生産費のうち飼料代が約五〇%を占めているというが、一頭当りの飼料代が一万円かかるとすると、六千円ですむ勘定になる。

だがしかし、この装置と工場設備に約一〇〇万円は必要とある。もう一つ、だがしかし、この程度の設備投資は、飼育頭数によっては極めて短期間に償却できる計算が成り立つという。

ともあれ、食肉の需要は年ごとに伸びを見せているが、これを満足させるため外国からの輸入を余儀なくされているそうであるが、日本人の胃袋を充たすのに、なにも外国産に依存することはあるまい。外貨節約の上からも牧草その他の方法で格安飼料を自給して生産コストを下げ、畜産事業興隆の途を講究すべきではなかろうか。（産業課長寄）

発酵飼料の1トン当り材料と生産費

材料名	単価	数量	金額
	円	kg	円
配合飼料	37	500	18,500
米ぬか	20	60	1,200
フスマ	29	60	1,740
落花生殻粉	10	60	600
豚生糞	0	320	0
醗酵剤	200	(4,5袋)	900
燃料	18	(10)	180
計		1,000	23,120

交通事故の賠償示談は まず県の相談所へ

▽交通事故の示談の方法
▽交通事故の損害賠償手続
▽車輌の登録などの手続
▽交通法令の解説や指導
▽交通妨害などの苦情処理
▽運転免許の取り方
▽その他交通問題一般

など交通のことならなんでも皆さんのご相談に応じます と、千葉県交通相談所では言っています。

県交通相談所は先般、千葉市吾妻町三丁目二八番地（千葉市清防署前十字路の角）（電話二七局四八二〇番）へ移転したとのことです。

この相談所では四人の相談員がいて、日曜、祭日を除いた毎日、午前九時から午後五時まで相談に当っているほか、週一回弁護士が出張して専門的なことを受持っています。相談料はもちろん一切無料で、書面や電話での相談にも応じていますが、ごく簡単なもの以外は面接相談が望ましいとのことです。そのほかにも県内各地で毎月一回くらい、出張相談所を設けていますが、その日時や場所はもよりの警察署にお問合せ下さいとのことです。

とにかく自動車、オートバイのはんらんで「交通戦争」といはれるような、物すごい最近の交通事情では何時災害にあうかわからないし、万一事故にあった場合、この相談所を利用して損をしないようにしたいものです。（県警だよりから）

運転者も歩行者も飛出し 横断に気をつけましょう

寒い冬の季節から解放され、花見など行楽のシーズン新入生が新しい服にランドセルを背にして、楽しそうに登校する時期ともなると、統計表を見るまでもなく、交通事故は増加することが考えられます。毎日報道される交通事故ニュースを聞くにつけ、見るにつけ国民の総てが事故防止に、真剣に取組んで行かねばならないと痛切に感じます。

車を運転する人に

横断歩道では必らず一時停止して、歩行者を安全に通行させることは勿論、横断歩道以外の場所でも、常に道路の状況に応じた安全運転を励行し、最近増加の傾向にある歩行者のとびだしに十分気をつけること。

春先の道路は軟弱なところが多く、舗装が完全でないところでは、あまり道路の端により過ぎないこと、狭いなる道路では無理な追いこしは絶対にしないこと気候がよいとつい居眠りしがちですが、居眠りは疲労と密接な関係があるので、前日の労れを持越さないよう心がけること酒のみ運転は絶対にやらないこと

道路歩行者に

昨年は県内で四、八八〇人の死傷者を出し、その内歩行中の事故死者一七〇人で全体の死者の四〇%を占めています。こうした実状から、今年の最重点として「歩行者保護」を掲げていますが、一般歩行者も近くに横断歩道があれば、必らずそれを利用するように努め、死亡事故の原因となりやすい、車の直前直後の横断、横断禁止場所の横断、路上へのとびだし等をやめ、進んで交通ルールを守る心構えを持つことが大切です。

特に新入園、入学の児童を持つ家庭では、通学や遊びの行き帰りの道路を、子供にわかりやすく教え、通学路でも危険な場所があれば、その場で安全な通行方法を教えてやる配慮が欲しいものです。

昭和四十三年
交通安全年間スローガン

運転者へ
あなたは今　安全運転をしていますか

通行者へ
さあ青だ　いやもう一度
右ひだり
児童たちへ
あそびません　こわいくるまの　とおるみち

成人式に参加して

牛熊　桑原　君江

なつかしい顔ぶれに、久しぶりのバスの旅。一月十五日、全国民がこの私達のために祝って下さる成人式。何とすばらしい事でしょう。

車窓から次々と走り去る変りばえのない田園風景も、うすい汚れた街並も何となく美しく見え、又、朝からアルコールに酔ったのか、この日の喜びの為か勢いよい男性軍のわけのわからぬ歌も、ずれた調子も快よく聞えるのはどういう事でしょう。

身も心も踊り、積もり積もった話に花が咲きクラス会のような気分にもなっていたバスの中、そして今まで考えて来た事を、再び誓った玉前神社、じっと正座し、足のしびれを気にしながらも身心共に清めたいと、ときれとぎれにしか聞こえぬ神主さんの声に耳を澄ますが、漠然としかわからなかった。

でも私は私なりに考えた。「成人」、大人になったという事がどんなことであるか、日本社会構成の一メンバーとして私達を認めてくれた社会の先輩達に恥じぬような人間になりたいと、この時を迎えて誰れもが決意するであろう「責任」という人間としての義務、一コの社会人としての義務の一つを自分なりに果して行きたいと思う。

又、今までは何やかやと父母や周囲の人々に頼り、甘えてきた私であるが、もうそうはいかないようである。顔の魅いのも、姿形の悪いのも、父母のせいにしていた、種が悪いからだと。

誰かが云っていた、二十才をすぎればもはやそれは両親行川アイランド。町長さんは初め沢山の人から祝辞をいただき、その中でチラリチラリと舞ってきた白いものが尚私達を祝福してくれるようでもあった。

空腹さにいらいらしながら一時間も待たされた昼食も、この日の思い出。

帰りのバスの中でのなごやかさ、ガイドさんの存在も忘れ、相変わらずの歌声とおしゃべり、あまりにも時間のたつのが早すぎたようで、なごりがつきずそのままクラス会へ。飾り気のないその場で、五年の才月もほんの一瞬だったような、変わったなあ！と感ずる友も話してみれば皆同じ。土に生きる人、職場で活躍する人、趣味をいかしている人、それぞれ道は違っても成人となって考える事は皆同じである。

農業に真剣に取組む彼らは農家へのお嫁さんが少ないと暗い顔をする。

都会での生活のむずかしさ東京の空気にさらされたあの人も、やっぱり故郷はいいなあという。職場での楽しさ、苦しさ、いろいろ話合った。勤めの関係上、ほとんど同年輩の人と話合う機会のない私。成人式に参加して本当に「よかった」「楽しかった」と思う。今は皆に「ありがとう」と云いたい。（教育委員会提供）

ふる里の話題

機転の地蔵（上堺）

上堺小学校の近く、横芝町と蓮沼村の境付近に箕輪堰という小さな水門があるが、そこから田圃の中を小学校の方面に通ずる砂利路を歩いて行くと、左手の道端に、五、六本の杉木立に囲まれた小さな祠があり、付近の人達はこの祠を「機転の地蔵」、「切られの地蔵」と呼んでいる。

祠の格子戸を開けると、玩具や、木や竹で作った、刀の模形が「所せまし」と納められているのが異様に目に付く。

相洲浦賀港に突然現われた四隻の黒船に日本国中が湧き返っている嘉永の頃、上総国屋形村の田圃路に、病に苦しむ浪人風の武士があった。容赦なく照り付ける夏の陽差しに、武士の額は渋茶色に焼け、最早汗も涸れ果て、路傍の草を掻きむしるように握りしめては、喉き込む姿が、哀れというよりは悲惨にさえ見えた。

丁度その頃同じ街道を足早やに通りかかった旅の武士があった。

倒れている武士の傍を一度は通り過ぎたか思い返したように足を戻した。「武士は相見互いか」とつぶやきながら、病気の武士を抱き起し涼しい木影に運び、近くの農家から水を運び、自分の腰の印籠から薬を取り出して与えるなど、手厚く介抱を続けた。

此の旅の武士は、自分の兄を討って遠電した仇を探し求めて、国元を出立したが、上総国屋形村、今切の松林に動皇と称する浪人者が大勢出没しているという噂を頼りに「もしや、その中に……」と淡い望みをかけて、武蔵、下総を経て、ついや刻か前に上総、下総の境を流れる栗山川を越えて来たばかりであった。

返り討ちの悲話を秘める「切られの地蔵」祠

幸運、厄払いを祈念する奉納木刀のかずかず

先を急ぐ身には病に倒れる武士を撫っている暇は無かったはずであったが、ふところに在る主君から賜った仇討免許状は武士としての自覚を呼び戻させて、かくては行き倒れのうき目を見ようとする同僚の介抱をさせたのであった。

約二刻（現在の四時間）……ようやく正気に戻った病の武士は、面識もないこの行きずりの旅の武士が、自分を救ってくれた恩人であることを知ると、泪を流さんばかりに感謝の心をこめてお礼を述べ、「自分は、若気の誤りから同輩を殺して国を立ち退いたものである。いま苦しみながらも、その同輩の顔に悩まされていた。これも天の報いであろう。」と言いながら、自分の名を姓名乗って旅の武士は仰天した。その姓名こそ、自分か長い歳月の間たずね歩いた仇と同じ名であった。

「何と、それではもしや」と生国をたずねると、まぎれもない兄を刺し殺して立退いた仇であった。

「憎い仇、いまその仇が死の境をさまよっていたのを自分が救ったというのは「立派に仇を討て」という、神のお告げ、亡兄の加護であろう」と考えて、名乗りかけて、切りかかった。病気であったとは言いながら相手も武士、しかも兄を討ち果した程の腕前であり、一度助かった生への執着もあったのか、なかなか手強く勝負の程はきまらなかった。そのうちどうしたことか病気であった武士が切り込む太刀を受けた旅の武士の太刀の目釘が抜けて、相手の太刀を真向に受けてしまっては致方なく、がっくりと腰を落して倒れた。

「しまった！すきを見て逃げようとしていたのに……」病を助けられた武士の声は悲痛であった。虫の息の下から、残念！無念！武士の情だ！首をはねてくれ……」とあえぎあえぎ叫ぶ旅の武士に、「許して下されよ…こんなつもりでは……」と病が再びぶり返したのか、喉き込みながら、うずくまっていたが、何時の間にか何処えともなく、立ち去って姿はなかった。その跡には、旅の武士が葬られ、墓石の代りに目釘の折れたままの大、小が立てられ、その前には、別の大、小が供えられていた。

恐らく武士の世のはか無さを知ってか、時世を推憶してか、再び武士という社会に戻らない決心をしたであろう此の病気の武士の、旅の武士に対する供養の心持が忍ばれた。

上堺の人達は、その塚に地蔵尊を建て香華を手向けていたが、何時か「討つも討たれるも、すべてその運命に期するものだ。病気で倒れた武士は往き倒れるところを救われ、そのため仇討の難をのがれることが、出来たのは、本当に運機に恵まれた人だ」とむしろ、その運の良さを羨やむようになり、何か幸運を求めようとする時、厄を払おうとする時等には、木製や竹製の刀を納めて祈願するようになったという。

いまでも祠の前には四季折々の野花等が供えられ、線香の煙が絶えない。